

# マルクスとジンメルの貨幣論

鈴木直

## 序 貨幣についての哲学

昨今、経済学を学ぶために大学に入学してくる学生たちは、あまり哲学には関心を持たないかもしれない。経済学は実学の典型、哲学はその対極に位置する虚学の典型と考えている学生も少なくないだろう。

しかし、哲学者今村仁司氏は貨幣について哲学することに最後までこだわった。むしろそれは、単なる経済機能を担うだけの貨幣ではない。貨幣の本質とは何か。なぜ貨幣は現在のような形で存在しているのか。貨幣はそもそもどのような役割を担っているのか。それを考えることなしに、社会哲学を構築することは不可能だと氏は考えていた。貨幣こそは、高度に複雑化した人間社会を保持するためのものとも重要な媒介者だからだ。この媒介の意味を掘り下げようとする経済学なき哲学、哲学なき経済学は、今村氏の目からみれば、ともに真の意味での経済学にも哲学にもなりえない。社会的現実を背を向ける哲学への批判と並んで、貨幣をその「経済学的捕囚」<sup>1</sup>から解放することは、今村社会哲学の主要課題の一つだった。

貨幣という、この変幻自在で気難しい媒介者は、より完成した形に近づけば近づくほど、実体を感じさせない記号と化していく。しかし「物的・素材的貨幣を廃棄したところで、貨幣形式を廃棄したことにはならない」（今村仁司『貨幣とは何だろうか』<sup>2</sup>）。今日、貨幣は種々のカードに記録された電子情報と化し、遠からず実物形態としての貨幣は日常生活の中から姿を消すかもしれない。にもかかわらず、この姿なき媒介者はかつてないほど広く、深く、われわれの生活を微小な断片にいたるまで律している。

今村氏は、貨幣についての哲学的考察を、主として二人の先達の影響下で続けてきた。一人目は、人間労働が一般的等価物としての貨幣に変容していく必然性とからくりをはじめて本格的に考察したマルクス。二人目は、個人と共同体との人格的紐帯を切断していく貨幣の力に、近代社会における価値分化過程の源泉を見ようとしたジンメル。

そして今村氏は、この二人を超え出る新たな貨幣哲学を構想しようとした。それは、一見空虚な媒介者に見える貨幣の源泉に、人類だけが抱く死への不安を探ろうとするユニークな試みだった。この

今村貨幣論は今後長きにわたって多くの後継者たちの思索を挑発し続けるだろう。ここでは、今村氏がつねづね、哲学上の水先案内人として敬意を払っていた右の二人の哲学者の貨幣論を検討し、今後の課題を探るためのひとつの出発点としたい。

## 一 マルクスの貨幣論

### 使用価値と交換価値

周知のように、マルクスは商品がもつ使用価値と交換価値の区別から『資本論』の議論を始めている。使用価値とはある商品が人間生活に対してもつ個別的な有用性にほかならず、商品自体の素材的属性に由来する、いわば質的に評価される価値だ。それに対して交換価値は、一つの使用価値が他の使用価値と交換されるさいに、その交換比を決定する量的比率として表現される。したがって一見それは他の商品との相対的な関係によつてのみ決まるように見える。

しかし、とマルクスは続ける。1クォーターの小麦が、a ツェントナーの鉄と交換される時、その両方を等式で結ぶためには、小麦の素材的属性にも鉄の素材的属性にも還元できない第三の共通の属性が双方に含まれていなければならない。それは、小麦の味や鉄の硬さといった具体的属性をすべて捨象した後、なお残りうるような一般的属性であるはずだ。

それは、つまるところ両者ともに「人間労働の生産物である」という属性にほかならない、とマルクスは主張する。たしかにそれは小麦の味や鉄の硬さのように五感に訴えることはない。しかし両方

の商品には抽象的な形で共通の人間労働が凝固している。だからこそわれわれは両者を比較したり、等式で結んだりできるのだ。このように論じるマルクスは、交換価値を形成するこの労働生産物としての属性を端的に「価値」と呼び、『資本論』の主たる分析対象とする。

ではその価値の測定は何を基準に行われるのか。それは、当然そこにすぎ込まれた労働の量、すなわち、ある時代のある社会をとつてみれば、その商品を生産するために要する平均的な労働時間（社会的労働時間）によつて決まるだろう。ここを出発点として『資本論』の議論は開始される。

### 誤解の種

しかしこの出発点には、すでに大きな誤解の種がまかれている。

この冒頭の議論をみるかぎり、マルクスはあたかも交換以前に物の価値が決定しうるかのような語り方をしている。なぜなら1クォーターの小麦を作るのに、ある時代のある社会で平均してどれくらいの労働時間が必要かは、a ツェントナーの鉄を生産するのに必要な平均的労働時間とは無関係に決定できるだろうからだ。商品に含まれる労働が「いったん純粋な人間労働に還元されたあとで量的に評価される」<sup>3</sup>のであれば、原理上は、交換価値が交換以前に、あるいは交換行為とは独立に決定できるといふ、いかにも現実離れした誤解が生じてしまう。かりに百歩譲ってそのことを認めたとしても、では1クォーターの小麦をa ツェントナーの鉄と交換する人々は、どのようにしてそれぞれの商品に投じられた総労働時間を

発見するのだろうか。

### マルクスの解決策

この疑問はけっして読者の一方的誤解からのみ生じているわけではないが、あえてマルクスの側に立ってその疑問に答えるならば、以下のようになるだろう。

商品の価値はたしかにそこに投じられた人間労働の総量によって「決まる」。しかし、だからといって、それが交換以前に「知られる」ものだと考えるのはまったくのナンセンスだ。

あらゆる商品は質的に規定される使用価値を持っている。しかしそれらは同時に一定時間の人間労働の産物であるという量的規定を潜在的に携えている。そしてこの潜在的属性が交換によって顕在化する。たしかに観念的には、労働生産物としての価値は交換行為に先行して形成されているように見える。しかし商品の価値形態が姿を現すのは、あくまで交換を通じてのことだ。

そもそも各商品所有者が交換を行なうさい、その行為は最初から互いの「交換価値」の取引を目的として行なわれるわけではない。交換の目的は、第一義的にはあくまで相手方の商品の「使用価値」を手に入れることにある。

マルクスはこれを布地と上着の例を使って説明している（『資本論』では周知のようにリネンとなっているが、ウールであろうがコットンであろうがかまわないので、以下では読者に分かりやすいように、引用を含めて簡単に「布地」と訳し変えておこう）。

今、二〇エレの布地が一着の上着と交換されるとしよう。布地の

所有者からみると、上着はそのままの形で使用することのできる使用価値として目の前にある。しかし布地は、とりあえず上着との交換手段として手元にある。布地の所有者にとっては、布地の質的属性ではなく、上着の価値を基準にして相対的にどの程度の価値がそれに割り振られるかという量的属性だけが重要な意味をもつ。

つまりそこには、それ自体の使用価値によって価値が決まり、それゆえに他の価値を測定する基準となりうるようなもの（ここでは上着）と、それ自体の使用価値によってではなく、他の使用価値との交換比率によってみずからの価値が決まるようなもの（ここでは布地）とが存在しているということだ。マルクスは交換において前者の役割を果たすものを「等価物」、あるいは「等価形態の状態にあるもの」と呼び、後者の役割を果たすものを「相対的価値」、あるいは「相対的価値形態の状態にあるもの」と呼ぶ。つまり今の例でいえば上着が「等価物」、布地が「相対的価値」として交換されているわけだ。あるいはより正確には、交換行為を通じて上着という等価物が布地の相対的価値を決定しているといった方がよいかもしれない。

この事情をマルクスは以下のような文章に要約している。『資本論』本文では「商品A」、「商品B」と書かれているものを、ここでも分かりやすいように、それぞれ「布地」、「上着」に置き換えて引用しておこう。

「このように、価値関係に媒介されて上着の実物形態は布地の価値形態となる、あるいは上着の身体は布地の価値鏡になる。

布地は、価値身体としての、人間労働の具現形態としての上着に自分を関係させることによって、使用価値である上着を自身自身の価値表現の材料にする。布地の価値は、このように上着の使用価値で表現されることで、相対的価値の形態をもつのである。<sup>4)</sup>

ちょっと読んだだけでは何のことか分かりにくいかもしれないが、実物形態とは使用価値を備えた商品の具体的なあり方を、価値形態とは交換価値としての商品の抽象的なあり方をいう。人間労働はたしかに価値を形成するが、労働は交換される価値そのものではない。労働はあくまで具現形態 (Materialität)<sup>5)</sup> に転換することで初めて価値になる。

この例でいえば、裁縫という人間労働は上着という有用な実物形態をとることによってその使用価値を実現する<sup>6)</sup>。では布地の方はどうか。たしかに布地もまた織布という人間労働を通じて実現した価値であることはまちがいない。しかし今、上着との交換のために布地を譲渡する商品所有者にとっては、布地は上着と同じ意味で実現した価値であるとはいえない。ここが重要なポイントだ。

布地の所有者にとって、上着は具体的使用価値を備えた商品の姿をままとっている。しかし布地が同じ意味で使用価値を備えているかどうかは、とりあえず相手方の関心事に過ぎず、布地の所有者にとっては二の次のことだ。布地は、ここではあくまで上着との交換可能性という一点で価値をもつ。布地がここで価値をもつのは、布地そのものに使用価値があるからではなく、そのかなたに上着という

使用価値を備えた具体的身体が透けて見えるからだ。もちろん布地そのものに使用価値がまったくなければ、そもそも交換は成立しないだろう。しかしそれは当面、布地の所有者にとっては第一義的な問題ではない。

上着のほうはその実物形態においてそのまま価値形態をとることができる。しかし布地は上着と関係を結ぶことではじめて、みずからの実物形態とは異なる価値形態を手に入れる。布地は、上着という身体をいわば鏡のように用いて、その鏡に映じた自分の姿を相対的な価値として確認するのだ。このようにマルクスは説明する。

では、その鏡には布地のどんな姿が映っているのだろうか。色や、丈夫さといった属性を備えた自分の姿が映っているのだろうか。否、とマルクスは主張する。上着を価値鏡として布地が受け取る鏡像はあくまで労働生産物としての自らの姿だ。それは裁縫労働を通じて布地上着に仕立てた労働と同じものであり、「上着のなかに堆積している」人間労働という属性の鏡像にほかならない。

ただし、布地が上着と一定の比率で交換されるとき、その交換交渉にあたって布地は「自分の価値を作っているのは人間労働という抽象的属性を持つ労働だ。あなたの価値を作っているのも同様だ。だからわれわれは同じ抽象的価値を等価値として交換しようではないか」などと言うわけではない。そのように言う代わりに「自分はある使用価値に等置できる相対的価値をもっている。こうしてわれわれが交換され、等置されるかぎり、われわれはともに同じ労働生産物であるはずだ」という言い方をする。

## 左辺と右辺の入れ替え

もちろん、考えればすぐにわかることだが、逆に上着を譲渡して布地を受け取る側からみれば、事態はまったく逆に見える。

「いうまでもなく、二〇エレの布地Ⅱ一着の上着、すなわち二〇エレの布地は一着の上着に値するという表現は、一着の上着Ⅱ二〇エレの布地に値するという反照関係をも含んでいる。しかし上着の価値を相対的に表現するためには、私は等式をひっくりかえさなくてはならず、そして私がそれをすればただちに、上着ではなくて布地が等価物になる。したがって、同じ商品は、同一の価値表現のなかでは同時に二つの形態をおびて登場することはできない。そうではなくて、両形態はたがいに両極へと排除しあう。」

ここで注目すべきは、等式の左辺と右辺をひっくり返すことは等価物と相対的価値を入れ替えることになるというマルクスの論法だ。

これが純粋な数学モデルであれば、両辺を入れ替えることよって等式の性質や意味が変化することはない。ということほとりもなおさず、この段階でのマルクスの議論は、数学モデルにはまだなりきっていないということだ。ここで想定されている商品交換は、あくまで「質」と「量」の交換であり、「量」と「量」の交換にはいたっていない。おのおのが自分の手元にある量（交換価値）を差し出して相手の手元にある質（使用価値）を手に入れている。したが

ってこの段階での交換を、あたかも神の視点から眺めて、両商品についてあらかじめ決定されている二つの量（交換価値）が交換されていると記述するのは、現実過程から疎外された観念的操作にすぎない。商品交換が純粋に量と量の交換として記述できるためには、なお多くのステップを経る必要がある。

## 貨幣の発生論

そこでマルクスは、この単純な形態を起点として、商品交換の拡大に伴っていかに貨幣が成立していくかを論証しようとする。

考えてみれば、上着という等価物によって布の相対的価値が決まったからといって、その相対的価値がなぜ布を生産するのに要する社会的労働時間に関連付けうるのか、というわれわれの疑問にはまったく答えたことにはならない。他の商品との交換比によって決まる商品の相対的価値規定と、商品生産に要する労働の総量という絶対的価値規定は、いったいどのような関係にあるのか。

この疑問に答えるには、まずは全商品の相対的価値が統一的に記述できると同時に、それが商品生産のための総労働時間となんらかの形で関連づけられなければならない。それにはまず全商品の相対的価値が貨幣価格という統一的表現を獲得することが必要だ。そこにいたるマルクスの議論は、大雑把に言うところの次のような順序をとって進む。

まず先ほどの例でいえば、上着という等価物によって布地の相対的価値が決められる。しかし布地は上着としか交換されないわけではない。使用価値をもつその他の等価物を基準にして、布地はその

つど、いろいろな相対的価値を受け取る。しかしその段階では、布地の相対的価値は、上着を等価物にすれば上着の価値で、お茶を等価物にすればお茶の価値で表現されるというだけで、上着とお茶はあいかわらず別個の等価物として併存しているにすぎない。

しかしながら、布地と交換される商品リストが長大化していくと、布地を扇のかなめにして一連の等価物がしだいに一つにまとまっていく。上着は一つの等価物として布地の相対的価値を決め、お茶も一つの等価物として布地の相対的価値を決め、コーヒーも一つの等価物として布地の相対的価値を決め、小麦も一つの等価物として布地の相対的価値を決める、という具合だ。

ここでマルクスは、さきほどの操作、すなわち等式の左辺と右辺を入れ替える操作を行なう。そうすれば上着も、お茶も、コーヒーも、小麦も、今度は布地を基準にして統一的に表現することができらるだろう。

「展開された相対的価値形態は

二〇エレの布地 $\parallel$ 一着の上着

二〇エレの布地 $\parallel$ 一〇ポンドの茶、等々

のような単純な相対的価値表現または第一形態の等式の総計から成り立っているにすぎない。

しかしこの等式のどれも、左辺と右辺を逆にしても同一の等式である。すなわち

一着の上着 $\parallel$ 二〇エレの布地

一〇ポンドの茶 $\parallel$ 二〇エレの布地、等々<sup>(9)</sup>」

こうして、これまでは多種多様な等価物が布地という一商品の相対的価値をばらばらに決めていたものが、突如、布地の方が一般的な等価物として機能することになる。その瞬間にこれまでばらばらな等価物であったものが統一的な相対的価値形態を得るにいたる。ここまでくればもう、布地のかわりに特権的な一般的等価物としての金が登場し、相対的価値形態をまぬかれた唯一の商品として、他のすべての商品に相対的価値表現を与えるようになるまではほんの一步だ。

#### マルクスの議論の弱点

しかし、ここで読者の多くはこんな疑問を抱くだろう。先の議論では左辺と右辺を入れ替えれば、等式の意味が反転し、もはや同じ等式とは見なせなくなると主張していたはずのマルクスが、なぜこの段階ではこうもあつさり「この等式のどれも、左辺と右辺を逆にしても同一の等式である」などと言つてのけられるのだろうか。ひよっとするとマルクスはひそかに理論上のごまかしを行なっているのではないだろうか。

この疑問に答えるには、そもそも両辺を入れ替えることによつて布地が相対的価値形態から一般的等価形態に転化するといふのは、具体的に何を意味しているのかを考えてみる必要がある。

それは上着を譲渡して布地を手に入れる人が、その布地を必ずしも使用価値とだけ見なす必要がなくなったということを意味している。今やその布地は、場合によつてお茶や小麦といった他の等価物

とも交換しうる一般的交換価値をなしている。上着をいったん布地と取り換えてしまっても、必要に応じてその布地は再度お茶や小麦に取り換えることができる。この事実を上着の所有者が前もって予測できるほどに、布地を中心とする交易関係が成熟を遂げているということ——これこそ左辺と右辺を入れ替えるということの現実的な意味にほかならない。

だとすれば、そこではすでに布地が一種の疑似貨幣として通用していることになる。左辺と右辺を入れ替えることによつて布地が一般的等価物と化すという転換を、マルクスはあたかも数学的処理として理論に組みこみ、しかもそれを貨幣の発生根拠の一つに数えている。しかし実のところ、この両辺の入れ替え操作は疑似貨幣の實在を前提にしてこそ、はじめて可能となる。両辺の入れ替えが禁じられるか、許されるかを決定するのは、あくまで現実過程そのものの中に潜む抽象性、いわば實在的抽象であつて、カント的悟性に由来する主観的原理としての抽象性ではない。マルクスの議論における両辺の入れ替え操作は、認識論的条件としてではなく、存在論的条件として読まれるべきだ。

ここではこれ以上立ち入ることは出来ないが、質と量の交換が量と量の交換に転化していく過程と理由は、個別事例と一般的範疇の間の相互参照的、循環的過程を前提にしてしか説明し得ない。われわれの生得的な認識装置は、個別的事例を最初から一般のカテゴリの一つの実現形態とみなすようにわれわれを促している。それは危険なほどわずかな個別事例からルールを想定し、それをまったく新しい経験にも外挿的に適用し、来るべき事態に備えようとする<sup>10</sup>。

その予見があればこそ、新しい経験もすばやく既成のルールの個別事例に分類されていく。貨幣の発生を認識論的に跡づけようとするならば、少なくともこの発見法的アプローチに十分な活躍場所を与える必要がある。

ところが近代科学は、この発見法的な知的操作に対してきわめてアンビバレントな態度を取り続けてきた。一方でそれが近代科学の絶えざる動因をなしてきたことは疑いえない。科学的インスピレーションはしばしば芸術家のそれと同一視されてきた。しかし他方で近代科学は、あくまで事実の確認と、厳密な数学的立証を真理の試金石とすることによつて、この種の帰納法推理にたえず疑いの目を向けてきた。それゆえ近代科学の方法は、疑いえない単純な部分から出発して因果連鎖をたどつて全体に到達しようとする系では絶大な威力を発揮したが、全体が部分へとたえずフィードバックされ、あらゆる原因が円環的に相互依存しているような系については、つねにその弱点をさらしてきた。『資本論』の貨幣発生論にもその弱点がつきまといつてくる。そこでのマルクスの説明には、この円環的過程をあまりに科学的因果論の枠内で説明しようとする強引さが垣間見える。ヘーゲルの思弁から脱して近代社会科学へと踏み込むために、よりによつて貨幣という厄介な媒介者を跳躍台に選んだのは、マルクス貨幣論の認識論的過ちだった。

マルクスの価値形態論の強みは、むしろヘーゲルの光の下で、実体的使用価値と関係的交換価値の間の相互規定関係、もしそう言いたければいわゆる弁証法的関係を粘り強く論じている点にこそある。価値生産の源泉はすべて具体的人間労働にあるにもかかわらず、

資本制生産様式による価値の産出は一見、非人格的な資本の自己増殖のように見える。それは交換を通じて抽象化された人間労働が、最後には一般的等価物としての貨幣に物神化され、本来、人間労働が生み出したものが貨幣自体に付着した価値のように見えてしまうからだ。資本制生産とは、この一種の錯覚をシステムティックに利用した制度だとマルクスの価値形態論は主張する。この点こそ今日においてなおわれわれに重要な示唆を与えているマルクス理論のアクチュアリティだといえる。

### ヘーゲルの影

ところでマルクスは先の引用文に次のような興味深い註を付している。

「見方によっては、人間にも商品と同じことが起きる。人はだれでも鏡をたずさえてこの世に生まれてくるわけでもないし、またフィヒテ流の哲学者のように「我は我なり」と言って生まれてくるのではないのだから、人はなによりもまず他の人  
に自分を映して見る。自分の同類としての人間パウロに關係することを通してはじめて、人間ペトロは人間としての自分自身に自分を關係させるのである。しかしこれによってペトロにとつては、皮膚と髪をそなえたパウロもまた、パウロ的身体をそなえたままで、人間という類の現象形態としての意味をもってくる。」<sup>11</sup>

布地が、自らの価値を最初から抽象的社会労働として理解することがないのと同様に、われわれは自分自身を最初から抽象的な「人間」という一般のカテゴリーで理解するわけではない。ペトロという人間は、自分と同種のパウロという個性を備えた具体的な人間と關係を持つことによってペトロとパウロに共通する「人間一般」としてみずから抽象的に理解するにいたる。しかしだからといって、そのパウロは最初から無個性で抽象的な人間一般であつてよいわけではない。それはあくまで皮膚と髪をそなえた個性的で一人的な人格でなければならぬ。その時はじめてパウロはその具体的身体性をおびたままで、一般的現象形態としての意味をもつようになる。

言うまでもなく、こうしたマルクスの発想には陰に陽にヘーゲルの影響がみてとれる。ここでのマルクスは註の形で商品論を人間論に投影して見せているが、実のところこの商品論こそがヘーゲル市民社会論の応用編であつたように思える。

もつとも、マルクスが個別的、具体的な価値形態から一般的、抽象的な価値形態へといたる道筋を科学的因果論に依拠して辿らうと苦慮したのに対して、ヘーゲルはむしろ相互行為の総体をこそ出発点に据える。たとえばヘーゲルは『イェーナ実在哲学』のなかで次のように論じている。

「自分に向き合う形で存在している自我 *das für sich seiende Ich* は抽象的なものである。それはたしかに働きはするが、その労働もまた抽象的なものである。(中略) したがつてあらゆる個別者はここでは個別者であるがゆえにひとつの欲求のため



に働く。しかし彼の労働の内容は彼の欲求を超えていく。彼は多くの人々の欲求を満たすために働き、その同じ事をすべての人がなす。つまりすべての人が多くの人の欲求を満たし、また彼の多くの特殊な欲求が、他の多くの人の労働で満たされる。(中略) こうした多くの抽象的加工作品の間には、また一つの運動が生じざるを得ない。これによって抽象的加工作品はふたたび具体的欲求、すなわち個別者の欲求となる。個別者は多くの欲求をみずからのうちに持つ一つの主体となる。加工作品を腑分けしていた判断は、加工作品を特定の抽象物として自分の対極に据えていた。その判断がいまや加工作品の一般性へと高まっていく。この一般性こそが加工作品のもつ同定性、あるいは価値である。この価値という点で、加工作品は同一のものである。物としてのこの価値自体が貨幣である。その抽象的価値が具体物へ、所有へと帰っていくこと、これが交換である。<sup>10)</sup>」

例によって分かりにくい言い回しではあるが、自己と向き合っている自我、あるいは分業の中で孤立した個別労働者を、ヘーゲルが最初から「抽象的なもの」と捉えていることに注目しよう。ヘーゲルはすでに実現している分業下での抽象的労働から出発して、多様な加工作品の交換を媒介にして主体が多様な欲求を獲得していく過程を描こうとする。個別労働者は分業体制の下で個別的欲求を満たすために抽象的労働をこなしている。しかしそこで作られる加工作品は結果として多くの人の欲求を満たす。そして同じことを、多くの人が行なうことによって、労働は社会的相互行為となり、多様な

欲求を満たすことになる。こうして抽象的分業に従事する「個別者は多くの欲求をみずからのうちに持つ一つの主体となる」。

加工作品は、いったんは貨幣という抽象的価値と化するが、交換はそれをもう一度具体物として個々の主体に返し、それによって主体の多面的な欲求を満たす。交換は各主体が自らの所有物を放棄するという相互行為に基づいて行われるがゆえに普遍的なものである。この普遍性のもとで、孤立していた分業がいったん貨幣価値に均一化され、それがもう一度具体物として主体の側にもどってくる。このヘーゲルの議論には、すでに生産と消費の二つのパラダイムが貨幣によって媒介されるという資本制社会の基本構図が予告的に描かれている。

一方、ヘーゲルがまだ知らなかった過酷な工場労働を目の当たりにしていたマルクスは、なによりも資本制生産の下で剰余労働の搾取が隠蔽され、蓄積されていくメカニズムに、分析と批判の刃を向けた。当時の時代状況を考えれば、その意義はどんなに強調しても強調しすぎることはない。しかし、今日的視点から見ると、その貨幣論はやはり生産パラダイムに傾きすぎているくらいがある。具体的労働から貨幣へ、貨幣から資本の自己増殖へと道筋が強調されるあまり、ヘーゲルがスケッチし、のちにジンメルが展開することになる貨幣のもう一つの機能が『資本論』では十分に扱われずにと終わった。

そこで次に近代貨幣論のもう一人の主要人物、ジンメルの議論の一端を概観しながら、貨幣論の今日的課題を展望しておこう。

## 二 ジンメルの貨幣論

## 基本構図

ジンメルは貨幣論の二つの基本的立場を以下のように要約している。

「貨幣の本質について議論するときに、つねにうかびあがってくるのは、いったい、価値を測定し、交換し、表現するといふ役目をおった貨幣というものは、それ自身一つの価値なのか、また価値でなければならぬのか、それとも貨幣は、自分で価値をもたないまま価値を代表している、いわばそろばん珠のようなもので、固有の実体価値をもたない記号や象徴として十分にその役割を果たせるのか、という疑問である。」<sup>13</sup>

この二つの立場をかりに貨幣実体論と貨幣記号論と呼んでおくことにしよう。マルクスはすでに見てきたように、支配的経済関係の所産が、たえずその由来を隠して具体物へと凝固するメカニズムに着目しながら貨幣の本質を論じた。死せる貨幣を生ける人間労働の結果と見なす点では、マルクスは基本的に実体論の側に立つ。しかし貨幣がその実体を隠蔽して記号として一人歩きする本性を備えていることを洞察していた点では、記号論的理解も合わせもっていた。記号論的理解の必然性を承認しながら、実体論の立場からそれを批判的に解体するというのがマルクスの基本戦略だった。

これに対してジンメルは、貨幣の体系と現実の体系を、それぞれ

に自足した二つの独立系とみなす。個々の貨幣が個々の現実に従属しているとは見なさない点で、ジンメルは基本的に記号論的理解の側に立つ。ただしジンメルは、各系内部での全体と部分の関係が、総体として相似的な対応関係をもっていることは認めた。たとえばある地域の商品流通量の商品総量に対する比率は、その地域の貨幣流通量の貨幣総量に対する比率と呼応している。両者の比率には一定の安定的関係があるはずで、逆にそれが安定的な関係を保つ時のみ、貨幣は貨幣として機能する。その意味でこの記号体系は、現実社会の実体的価値体系と無関係に自らの遊戯にふけっているわけではもちろんない。貨幣とは、いわば現実の中にある実体間の「関係」だけを抽出し、その関係を記号体系に翻訳したものにほかならない。

こうしたジンメルの発想には、物理学的自然をいったん数学のこゝとばに翻訳し、数学内の処理をほどこした結果を再度物理学的自然にあてはめるといふ近代科学の基本操作に似たものがある。その記号体系ができるだけ実体的規定をもたない純粋な形式に近付けば近付くほど、物理学的自然の内部の相互関係はむしろ正確に写し取られるだろう。

貨幣から記号としての役割を差し引けば、残るのは紙切れや金属片としての微々たる使用価値にすぎない。実用世界のメンバーとしては、まさに落ちこぼれに等しい。実用世界からこのように排除された存在であるということが、ジンメルによれば貨幣が実用世界の媒介者としてもっとも有効に活躍できる秘密なのだ。

たぐいまれな理論的ファンタジーをもつこの哲学者は、この同じ

機能が生活の実用連関から排除された芸術についても、またキリスト教世界から排除されたユダヤ人についても見いだせるのではないかと考えた。芸術作品は実用世界の模写ではなく、自らの美的法則に従う閉じた空間で自己完成をめざす。ユダヤ人は市民としての通常の権利や義務から排除され、地縁や血縁から自由な交易によってみずからの存在を維持する。しかしまさにこの非従属性、非帰属性が、芸術に、あるいはユダヤ人に、市民社会における特権的な媒介者、葛藤の宥和者としての能力と役割を与える。このようにジンメルは論じた。<sup>14</sup>

### 近代文化における貨幣の役割

ジンメルによれば貨幣はつねに二重の歴史的役割をはたしてきた。貨幣は、共同体への個人の人格的帰属性を弱体化する。しかし同時に、貨幣を媒介にした交換によって、人々は見知らぬ人々とも交易関係を結べるようになる。それは分業を可能にし、同時に多くの見知らぬ人々への依存性をも高める。今日、われわれの生活物資は世界中の無数の人々と組織に仲介されてわれわれのもとに届いている。これは物々交換経済のもとでは絶対にありえないことだ。

この発展は、一面では生の均一化、平均化、価値の平板化をもたらす。人々から決定的な満足感が失われ、質的価値が単なる量的関心にとって代わる。あるものにどんな価値があるのかという問いは、それはいくらするかという問いに同化していく。特殊な個性に魅力を感じる繊細な感受性が鈍麻し、あらゆる最終的満足は、より多くの富を得るための単なる手段的価値によって先へ先へと引き延ば

される。これが貨幣のもたらす第一の側面だ。

しかしジンメルは同時に第二の側面をも強調した。貨幣は世界を一つに結び合わせることによって「普遍的に人間なるもの」という觀念の発生に絶大な貢献をなした。それだけではない。個人を集団から人格的に切り離すことによって、貨幣経済は個の自由と自立という理念を背後から支えた。たとえば、われわれが共同体行事への参加を、一定の会費を納入することで免除されるようになれば、たしかに共同体の一体感は薄れるかもしれないが、同時にわれわれは共同体が持つ社会的コントロールから自由になれる。またすべてのことが金に換算されるようになると、金銭には換え難い価値についてのわれわれの感受性はいつそう研ぎ澄まされる。お金に換えられないはずのものを金で買うという売春行為が、近代社会ではそれまでになく強い道徳的葛藤を生み出すようになる理由もそこにある。<sup>15</sup>

### 消費パラダイムへの視点

ジンメルの貨幣論が、マルクスのそれに比べて格段に現代的なのは、貨幣経済が切り開いた美的経験や快楽の解放的役割を正当に評価した点だ。

一八九六年、ベルリン見本市を訪れたジンメルは、そこに展示されたありとあらゆる工業製品の圧倒的な量と多様性に息をのむ。その時、この鋭敏な観察者は、ところ狭しと肩を並べる実用的な展示品の間から、ある種の娯楽的要素が立ち昇ってくるのを見逃さなかった。

「自由競争の支配の下での、しかも需用に比べて平均的に供給過多状態の下での商品生産は、いきおい事物に実用性を越えた誘惑的な外見を与えることに向かう。合目的性と内的特性に関する競争が終わると——いや、多くの場合、終わるより以前にすでに——対象の外的魅力によって、いやそれどころかそれらの陳列の仕方によってさえ、購買者の関心を刺激しなければならなくなる。」<sup>10</sup>

そしてジンメルはこう続ける。これが、ほかならぬ物質的関心の極度の高まりと過酷な競争の危機が、美的な理想へと転じる転換点であり、そこではもつとも上品なものが、上品さのかけらもないものから生まれてくる、と。こう主張するジンメルは、同時にこの多様性と差異の魅力を享受できる消費部門こそが、生の細分化を強いる生産部門を穴埋めする現代的補償装置であることを認識していた。

「文化が発展すると、仕事はますます特殊化し、一面化し、担当分野にますます狭く限定されるようになる。ところが、こゝうした生産の細分化に対応して消費が細分化されることはけつしてない。(中略)本来、人間の魂は多面的な能力をそなえることでひとつの小宇宙をなしているのに、現代の労働の細分化過程は、その能力に完全な発展の機会を与えない。そこで、こゝうした能力の欲求不満がそのはげ口を多様性に、差異の魅力に、あるいは対立的要素が殺到する受容と享受の世界に求めること

になる。」<sup>11</sup> (強調、ジンメル)

ここには先のヘーゲルの引用がマルクスを飛び越えてこだましている。いかに下品さを隠し持っていようと、消費の快楽には、ある種の全体性の仮象が宿っている。過労死寸前で長時間労働を強いられる現代人が、みずからをプロレタリアートとは理解せず、革命的な状況も出現しない大きな理由は、過酷な労働を通じて得た貨幣が、『資本論』の時代にはまったく考えられなかったような、きわめて多様な欲求を満足させてくれるからだ。昼は賃金奴隷の生活を余儀なくされていても、夜になれば、かつては王侯貴族にしか手の届かなかったような服飾品で身を飾り、世界中から集められた食品や酒類を味わい、映像と音楽を享受し、携帯やパソコンで友人のみならず、世界中の人々と交流することができる。

貨幣はわれわれの生活を、今やくつきりと二つの場面に分割している。貨幣を唯一の「目的」とする生産パラダイムと、貨幣を唯一の「原因」とする消費パラダイム。前者ではあらゆる困難がただ一つの目的に向かって収斂し、後者ではあらゆる幸福がただ一つの原因から放散する。前者の場面では、私は理不尽な顧客にも頭を下げ、ほとんど卑屈なほどにサービスの限りを尽くさねばならない。しかし同じ私が、仕事の後はホテルのレストランでウェイターをあごで使い、高級料理を食し、無礼な振る舞いにはクレームをつけて支配人に頭を下げさせることもできる。私がどのような身分に属し、どのような服装をしているかは問われない。金がすべてなのだ。

人々が単一の目的のために強制を甘受し、単一の原因にうながさ

れて自由を消費する。しかもそれぞれの局面では、きわめて単純な因果律が直線的に作用する。成果をあげれば賃金上がり、より多くのお金を所有すれば、それに見合った楽しみが用意される。単一目的をめざす因果連鎖と、単一原因に発する因果連鎖。

考えてみると、これに似た世界観を人類はかつて所有していた。それはまさしく一神教が作り上げる一つの宗教的世界像の構成原理に近い。究極的な目的原因 *causa finalis* としての神と貨幣。この意味で「貨幣は現代の神になった」という言い方には単なる比喩以上のものがある。ジンメルの貨幣論はこの基本構図を百年以上も前にはつきりと捉えていた点で群を抜いている。

### マルクス貨幣論の現代的意義

では他方のマルクスの貨幣論は、現代においてどのような意義をもっているのか。このことを最後に要約してこの小論を閉じることしたい。

『資本論』第一巻は大きく分けると価値形態論と搾取論からなっている。

(一) 搾取論に関しては、現代社会にも『資本論』の記述を彷彿とさせる現象がいくらかでも見いだせる。少数者への富や資本の集中、マネーゲームによる資本の自己増殖、その一方で拡大する貧困、非正規雇用の増大、正規雇用者の長時間労働や過労死、生産性向上のための労働の細分化と高密度化、出来高賃金制、昼夜交代勤務制の拡大、景気調整のための産業予備軍の形成、不況期における彼らの転落、横行する食品偽装、資源や市場の国際的争奪戦。これらはす

べて『資本論』が資本制生産様式の必然的随伴現象として詳しく分析しているものだ。

現在、安定的な国家運営ができている先進諸国は、自らが掲げているスローガンやイデオロギーとは無関係に、例外なく剰余価値の社会的再配分によって資本の暴走を緩和する社会民主主義的政策を採用している。国家関与の度合いが高すぎれば資本制生産様式が持つダイナミズムが失われ、国家関与を縮減し、規制緩和を推進すれば、格差と社会的緊張が拡大する。政権交代は、単にそのさじ加減をめぐって時折生じる政治的エピソードにすぎない。これは資本制生産様式の基本性格についてのマルクスの分析が大筋において正しかったことを裏書きしている。

ただしマルクスが過小評価していたのは、複雑な近代社会が獲得することになる資本の制御に関する政治的、経済的学習能力だった。皮肉なことに、ほかならぬマルクスの予言が、この学習能力の強化に大いに貢献した。その結果として、成熟した資本制社会の内部からは革命的な階級闘争は生じなかった。

(二) 他方、価値形態論は、今日からみると貨幣がもつ機能をあまりに一面的にとらえすぎている感がある。第一次、第二次産業が経済活動の大部分を占めていた時代では、それも無理のないことだったかもしれないが、消費部門での差異や多様性の創出機能は、マルクスの貨幣論におおつけ加えられるべき現代的要素ではある。ジンメルの貨幣論はその空隙を埋める貴重な貢献だった。

しかしジンメルが描いた生産と消費の二極分化もまた、今日のわれわれにとっては克服していくべき課題だ。貨幣を唯一の目的とし

て働き、貨幣を唯一の原因として楽しむ世界は、あたかも一神教の現代版としてわれわれを拘束している。<sup>18)</sup>しかし本来、人間が他者との交流、交易をつうじて作り上げる環境世界は、かつてヘーゲルが、そしてその光の下でマルクスが分析したように、関係が個別事例を、個別事例が関係を制御する複雑で循環的な世界だ。そこには単一の目的も、単一の原因も存在せず、因果連鎖は単純ではない。そこにはたえず正負のフィードバックが作用し、多くのプレーヤーが複雑で混沌とした利害の網の目を生きている。労働が喜びを生み、連帯が献身への動機づけを与えるような共同体の形成が、いつかは貨幣一元論による二極分化への対案として登場すべきだろう。

マルクスの貨幣論には、少なくともその複雑な弁証法的運動の一面面を粘り強く掘り起こし、価値そのもののように見える貨幣に、数多くの悲惨な具体的人間労働の搾取が凝固していることを見ようとする視点が生きていた。貨幣には交換によって抽象化された支配関係が「受肉している」(今村仁司)という思想は、今日もなお、いや今日こそ、生産と消費に引き裂かれた現代社会の批判的検討のための貴重なヒントを示唆していると思える。

## 注

- (1) 今村仁司『貨幣とは何だろうか』、ちくま新書、一九九四年、二三四ページ。  
 (2) 同、二二〇ページ。  
 (3) K・マルクス『資本論第一巻上』、今村仁司、三島憲一、鈴木直訳、マルクスコレクションⅣ、筑摩書房、二〇〇五年、七〇ページ。以下の引用は基本的に同書からのものだが、読みやすさを優先して一

部、訳文を修正した個所がある。また強調のためのゴチック表記は引用中では省略する。以下、単に『資本論』と記す。

- (4) 『資本論』、八一ページ。ただし、本文中の商品Aは「布地」、商品Bは「上着」と訳しなおしている。また同書では「受肉」と訳されている単語 *Materiatur* は、この引用および本論では「具現形態」と訳している。訳者の今村仁司氏はキリスト教神学のメタファーがここに流れ込んでいるという思想的認識から、この単語を「受肉」と訳すことにこだわった。たしかに『資本論』には関係概念の実体化を表現するのに、*Inkarnation* (化身)、*Verkörperung* (肉体化)、*Transsubstantiation* (実体変化) などのキリスト教用語がしばしば登場する。

(5) 右の註参照。

(6) 以下の記述は、左記の拙論を一部参照している。鈴木直「翻訳としての『資本論』」、『現代思想』Vol. 32号、青土社、二〇〇四年四月臨時増刊(総特集マルクス)、一六六ページ。

(7) 『資本論』、八〇ページ。

(8) 同、七六ページ。

(9) 同、九九ページ。

(10) たとえばわれわれは、小さいネコ、白いネコ、三毛のネコといったいろいろなネコを見て、それがネコという一つのカテゴリりでくくりうるグループをなしていることを直観する。ところでわれわれは、ネコという一般概念を獲得するために、いったい何匹の異なった個別的ネコを見なければならぬだろうか。幼児の発達過程を観察しても、我々は驚くほど少ない実例から、その一般的範疇を予感していることがわかる。演繹的推理の体系的訓練がなされるはるか以前に、幼児は帰納的推理についての天才性を発揮する。母語の習得過程はその典型例といえる。これについてはたとえばR・リード

- 『認識の生物学』、思索社、一九九〇年、および筆者の訳者解説を参照。
- (11) 『資本論』、八二ページ、註一八。
- (12) G.W.F. Hegel: *Gesammelte Werke*, Bd. 8, (Felix Meiner), 1976, S. 224f.
- (13) G. Stimmel: *Philosophie des Geldes, gesamttausgabe Bd.6*, Frankfurt a.M., (Suhrkamp, strw 806), 1989, S.139.
- (14) たとえばG・ジンメル『ジンメル・コレクション』(北川東子監訳、鈴木直訳)、二〇〇四年、ちくま学芸文庫、所収の「取っ手」、「額縁」、「よそ者についての補論」などのエッセイ、あるいは筆者の解説「進化のジレンマ——ジンメルの今日的意義」などを参照。
- (15) 売春についてのジンメルの考察については同書所収の「現在と将来における売春についての覚え書き」参照。
- (16) ジンメル「ベルリン見本市」、同書、二四三ページ。
- (17) 同、二三八ページ。
- (18) これについては次の翻訳および訳者解説を参照。W・ベンヤミン「宗教としての資本主義」、三島憲一訳・解説。『現代思想』Vol. 32-5、青土社、二〇〇四年四月臨時増刊(総特集マルクス)、一七〇ページ以下。